日刊サン
2001年 6月15日（金） The Japanese Daily Sun

Weekend Calendar

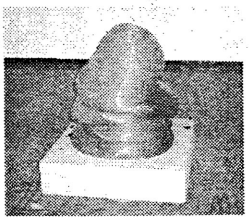
週末の決め手

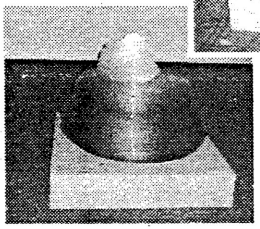
芸術は“生きている”

ドイザキ・ギャラリー　角永和夫展

現在、リトル東京の日米文化会館内ドイザキ・ギャラリーで開催中の「角永和夫　素材との対話：現代美術家ー30年の歩みー」は、ちょっとしたカルチャー・ショックを受けてしまいそうな現代アートの作品展だ。（～7月29日まで）

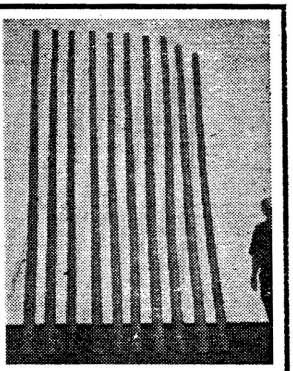
私たちが、芸術（もしくは美術）として学び認識していたのは、もともとある素材、例えば紙や木を元の形をほぼ完全に変えてしまって自分だけの形、色を作り出すことだろう。それが、絵画や彫刻とか呼ばれるものである。ところが、角永の作品群は、どれひとつとっても、素材に絵の具をこすりつけた跡もなく、彫刻刀をきざんだ気配もない。そこにあるのは、私たちが日常の生活で目にする生活素材の“生”の姿なのである。





角永は言う。「私の作品は一つの素材に対して、ある方法論を処置したものです。私が行うのは、その決まったフレームだけで、あとは何もしません」

角永が処置を行うたびに、素材は変化する。しかし、そこには科学的な現象としての画一性はあれど、視覚的には温度、湿気、重力などのコンディションにより変化の具合は異なる。左下の作品2点は、角永の扱う最新の素材ガラスを使ったものだが、角永はガラスを知るために、3年かけてガラス工場での製作工程になじんだ。そこで溶けたガラスの粘性や透明感などその特性を把握し、“方法論”を確立、つまりアーティストの恣意性が介入しないシステムを作り上げた。そのシステムとは板ガラス素材を炉で溶かし、一定量の溶けたガラスが細い注ぎ口から下の冷却炉に流れ落ちる。その時々の重力と粘性がガラスにさまざまな変化を与える。しかし、そこにあるのは、ただ方法論に任せたガラスの“為すがまま”の姿なのだ。



今回の展示会では、他に素材として木、竹、紙などを扱っている。銅線を巻き付けられ、壁に立てかけられた竹（＝写真上）、木の丸太に切れ目を入れた作品。これらは、展示しているそばから微妙に変化が進行する。会場で、素材が“生きている”ことを確認してほしい。

（文・写真／Y・Hashimoto、展示会のパンフレットを参考）

「Kazuo Kadonaga」●日時：7月29日まで●入場料：3ドル●場所：George J. Doizaki Gallery（244 S. San Pedro St.）●問い合わせ：213-628-2725